動物保護と文化財保存の専門家が語る未来へのまなざし

飯間裕子（釧路市動物園 獣医師）、高橋佳久（北海道博物館 学芸員）
報告者：卓彦伶（北海道大学文学研究院）

動物園では、野生動物との共存に対する関心が高まる中、環境教育施設としての役割が特に求められています。また、博物館では、災害時における文化財保護や文化財の保存・活用に関する取り組みが重要視されています。そこで、第5回の「となりのしばふ」では、天然記念物であるタンチョウのレスキューと教育啓発活動に取り組んできた釧路市動物園の飯間裕子氏と、文化財保存科学の専門家である北海道博物館の高橋佳久氏をお招きしました。動物保護と文化財保存という一見接点のない現場から、動物園と博物館がどのように連携し、未来に向けた交差点を築けるのかを語り合いました。

まず、釧路市動物園の飯間裕子氏の報告「タンチョウレスキューの現場から」では、タンチョウ生息の現状と課題を紹介した上で、釧路市動物園でのタンチョウレスキュー活動の取り組みについて説明しました。

タンチョウは一度絶滅したと思われていたが1924年に釧路湿原で10数羽が再発見され、地域住民による保護活動を実施していた。現在（2024年2月時点）、北海道内には約1,800羽の生息が確認されました。生息数の数が増えるということは保護活動の大きい成果ですが、生息数増加によって釧路湿原では過密状態になっているため、生息地が拡大・分散し、現在は十勝、根室、釧路の周辺だとどこにでもタンチョウがみられる状態になっています。そのほか、サロベツ湿原でも約50羽が生息しています。さらに、最近では長沼町でもタンチョウの生息が確認され、10年、20年後には札幌圏でも見られるようになる可能性があります。また、飯間氏によると、釧路に生息しているタンチョウは、湿原から出てきて酪農家で牛と一緒にエサを食べている姿が日常的にみられます。このように、酪農家や農家など人間との距離が近くなる一方で、農業被害や

牛の怪我など色んな軋轢が少しずつ起きています。タンチョウが事故に遭って釧路市動物園に運ばれてきたことも増えています。実際、釧路市動物園におけるタンチョウの保護収容数は、1975年の開園当初は年間10羽前後でしたが、2000年から急増し、年間30羽程度となり、さらに2020年には50羽を超えました。

釧路市動物園がタンチョウの保護活動で担う役割について、主に①保護されたタンチョウの治療を行うレスキュー・治療活動、②死亡して発見された野生のタンチョウの死因調査（病理解剖）、③大規模な飼育下繁殖群を維持する域外保全の3つの活動です。また、この3つの活動を踏まえ、調査・研究、教育・普及活動も展開しています。

釧路市動物園では2018年から義足のタンチョウを公開飼育しています。近年、動物福祉が注目される中で、「義足のタンチョウは幸せですか？」といった問いかけがよくされるそうです。これに対し、飯間氏は「釧路市動物園のタンチョウ保護活動を、いかに野生個体群の保全や環境保全につなげることができるかを常に意識して活動している」と語りました。具体的には、義足の製作や治療活動の現場で直面する課題を解決し、その成果を蓄積していくこと、さらには教育・普及活動を通じて動物園の取り組みへの理解を深めてもらい、人々の行動変容につなげることを挙げていました。義足のタンチョウは飼育下繋殖群に合流することが難しいが、「動物園で展示することはその姿を見てもらい、タンチョウについて知る・考えるきっかけになれば」と話しました。

次に、北海道博物館の高橋佳久氏による報告「博物館における文化財保護の仕事」では、普段は博物館の外からその実態をうかがい知ることが難しい、文化財保存の現場における活動と課題について報告いただきました。

高橋氏は文化財と保存・修理（修復）の関係を、人間の病気と治療を例にとって説明を試みました。文化財の保存と修復は病理学における予防と治療の立場に似ているとした上で、人間と同じように、健康かどうかを調べ、調査結果をもとに脆弱な部分を補修（＝治療）し、保存環境を整える（＝予防的保存）とかみ砕いて説明しました。加えて、博物館の収蔵庫は文化財にとって病院になるかそれともホテルなのかという興味深い問いかけをしました。「コンシェルジュや医療従事者のような気持ちで収蔵庫内の見回りをしながら、資料にとって快適な環境が維持されているかを確かめる」ことを意識して取り組んでいます。

後半のディスカッションでは、動物園と博物館は普段お互いの存在を認識しつつも、連携して取り組む機会が少ない関係性にある中で、北海道博物館と釧路市動物園が連携事業を展開していくという前向きな展望について語り合いました。